

総 括

東海大学 文理融合学部 経営学科 教授

濱田 健司

1. 「農」と「くらし」を守るために必要なこと

いつものJA共済総研セミナーでしたら、全国各地の実践者が登壇して、事例報告としてお話をするとありますが、今日の後半は高木さんが動画を使って事業報告を行いました。

私ははじめに農村RMOについてお話ししました。「農」と「くらし」に関して、新しい地域運営組織をつくる、あるいは既存の地域運営

組織を支援し、それぞれの地域に応じて独自の活動をするといった活動が、現在農村RMOの取組みとして進められているわけです。

農地管理や地域資源活用についていえば、地域によって自然環境や歴史的背景が異なりますので多少の違いはあるものの、農村地域であれば似たような支援方法になると思います。

しかし、生活支援については、地域によって大きく違ってきます。例えば様々な福祉的な課題や、交通の問題などが出てくるわけですね。

「農」と「くらし」を守るという意味では、地域に応じた多様な協同組織、運営組織が必要になってきます。だからこそ、単純にこれが成功モデルだということではなく、地域に応じた協議体を持つということ、行政も含めネットワークを組んでいくことが必要になると思います。

2. 援農ボランティアに必要なこと

高木さんからは「農」、特に農地管理と人手不足についてのお話がありました。そこでJA共済総研が援農ボランティアのモデルをつくり、実際に取り組んでいるということでした。

この取組みを大きく分けると、一つはもともと地域内に住んでいて、今まで農業経験のない方たちが農業体験をするという、援農ボランティアの活用です。

もう一つは地域外からのボランティアをどの

ように受け入れて、援農につなげていくか。それをJAさんとともに、モデル的に取り組んでみた、というお話でした。

そのなかで私は、交通費や、少し報酬のようなものもやはり必要かな？と思いました。

実は私は昨日まで、北陸の能登半島に行っていました。能登半島地震・豪雨で被災し、仮設住宅で生活されている方たちに危惧されたのは「関連死」でした。そのため仮設住宅には、見守りをする方たちが恒常的に入っています。

統計的に見ると、平成28年の熊本地震で発災一年後の関連死者数は直接災害で亡くなった方の約4倍でしたが、能登半島地震では何と約1倍、ほとんど同じ人数でした。その違いは何かという、後者では早い段階から、地域外から見守りをする方たちを受け入れたことでした。

JOCA（公益社団法人青年海外協力協会）というJICA（独立行政法人国際協力機構）

海外協力隊のOB・OG組織があるのですが、海外で活躍し、地域を活性化するノウハウを持ち、ソーシャルマインドが強い方たちの集まりです。能登半島ではそういう方たちにお金を支払って支援しています。

ですので、援農ボランティアについても、恒常的に参加していただくためには、少しはお金が必要かなと思っております。

一方で「楽しさ」も重要になると思います。

農福連携の関連でお話しします。かつて農業経験のない方たちが、介護予防の一環で農作業体験をしたことがありました。約30名の方々が体験したのですが、何とそのうちの数名が新規就農者になったという事例がありました。

つまり農的な体験がしっかりとできる仕掛けをつくるだけでなく、参加者に楽しさや生き甲斐を感じられるようなものが、援農ボランティアにもあったらよいと思います。

方から「私たちはこんなにコストが上がって、売上が伸びないなかで、なぜ社会貢献をしないといけないんだ？」と言われました。実はそう思っている農業者さんは、全国で見てもまだまだ多いのです。

今、人手が足りないという状況もあると思いますが、本当に農業者の方の理解を持っていたくには、僕はJAさんの役割はとても大切だと思っています。

JAさんの役割について、先程の高木さんのお話に、農地管理のモデルのひとつとして「雇用」がありました。農福連携の取組みとして、JA高知県安芸地区では農業就労サポーターを配置しています。^(*)農家さんが障害者を雇用した際、農家さんと障害者の方の間にサポーターが入り、双方から意見を聴いて定着させていくといった取組みをしています。

無料職業紹介事業に取り組みるJAさんは多い

実は高齢者だけでなく、農業に関心を持っている大学生もいます。援農ボランティアに広く興味を持ってもらう方法を考えていくとよいのではないかと思います。

3. 農福連携におけるJAの役割

農福連携に関していうと、JA共済総研では地域の福祉事業者や日本農福連携協会と一緒に、JAさんに色々な提案をするなどの取り組みをしています。現在、都道府県レベルでは農作業受委託のマッチングが始まっています。そういったところとも連携して、さらにJAさんが介在することで、大きく進んでいきます。

私は富山県の農福連携推進会議のオブザーバー、実質的にはアドバイザーを務めています。農福連携の理解が未だ充分ではない状況があり、農業者の方の壁がすごく高いと感じています。

今から3年前、富山県に行った時、農業者の

ですが、例えば農家さんに、単に職業として人を紹介するだけではなく、雇用についても定着を支援するような役割が期待されます。

例えば働いている方も、いきなり農業を始めて、問題を抱えることもあると思いますし、実は農家さんも不安に思っているかもしれない。そこで両者の話を聴いて、定着を促進するアドバイザーのような役割を、JAさんに担ってもらうのでもいいのかな？と思っています。

(*) 詳細は市川和加・横山木実子「JA高知県安芸地区へ農福連携の取り組み」JA共済総合研究所「多様な担い手と農福連携（令和5年度JA共済総研セミナー）」2024年7月発行 56―67ページを参照。
<https://www.jkri.or.jp/PDF/2024/bertOchikawa.pdf>

4. 未利用農地のさらなる活用方法

高木さんからは未利用農地の活用についてもお話がありました。これはもつと色々な活用の仕方があると思っています。農地として活用し、農地管理に繋がっていけばよいのですが、折角

ですから、例えば食育や教育体験、福利厚生につなげていくこともできると思います。

援農ボランティアのお話を聴いて頭に浮かんだことです。例えば今、東京では非常に生きづらさを抱えて、悩んでいるサラリーマンがすごく多いですね。最近、会社を途中で辞める若い人たちが非常に増えているといいます。

そういう人たちが退職を考える前に、福利厚生の一環で、レクリエーションのような感じで農村体験に行ってもらうのはどうでしょう。それをJAさんに受け入れていただくのです。都市で働く人たちの心身を整える場として農村があってもよいのではないか、と考えました。

5. 「くらし」の支援への期待

「くらし」の支援について、JA共済総研では特に移動手段の確保と再生可能エネルギーの活用について現状把握を行っているとのこと

くってほしいのです。

農村で収入がなければ、人は住めませんよね。そこで多様な兼業を促進すればよいのでは、と思います。さらにいうなら、地域を飛び越えてもよいわけです。私も東京と熊本をよく行き来していますが、すごく面白いです。

(2) 柔軟な働き方

例えば午前中は会社の仕事、午後は農業…のように、もっとフレキシブルにやってよいと思います。ITを活用すれば、もっといろんなことができます。

(3) 年金制度

国がどんなに転職してもしっかり引き継がれていく年金制度を確立し、国民に完全な年金を保障できるようにすることです。

した。移動支援でできることについては、これから何かモデルを考えながら試行していくと思いますので、期待しております。再生可能エネルギーについても、何か新しい取組みが出てくるのであればよいと思います。

6. これからの日本に必要なこと

私は今、熊本に住んでいますが、やはり住んでみると、なぜ農村に人がいないのかを考えることになります。

(1) 兼業の促進

特にこれは国段階でやってほしいのですが、これからの農村は、農業以外のあらゆる職種の人々が兼業して支えてもよいのではないか。例えば町議会議員が、ITの技術者が、学校の先生が農業をやってもいいと思います。官民、あるいは様々な業種が連携し、兼業する形をつ

(4) 教育や医療、交通の保障

日本も教育が一部無償化されましたが、すべての教育や医療、交通についても保障すべきだと思います。

例えば北欧に行くと、教育にしても医療にしても無料、普通に税金でやっています。国は公共事業としてモノにお金をかけるより、これらを制度・事業としてきちんと保障するべきだと、私は思います。

(5) 水・土・食を守る

それから、日本の水、土、食を守ってほしいです。私は今とても危惧していますが、国として根本的に考えていくことを打ち出す必要があると思います。

(6) 新たな社会システムづくり

もう一つは、しっかりと一人の国民を支える

ことができるよう地方自治体が役割を果たせるようにすること、特に地域が権限を持てる政策にしていくなことが重要です。縦割り行政を解消して、地域で予算をフレキシブルに使えるようにしていくと、もっと動けるような気がします。

私は誰もが本当に自分がやりたいことを仕事にできるような社会システムにした方がよいと思います。農村に行くと活き活きとしている方たちがいます。そのなかには高校や大学を卒業して就職し、社会人経験で得たノウハウを持って農村に移り住み、自分で収入を得ながら農業に取り組んでいる人たちが、実はたくさん現れてきているのです。

そして今まで人がやっていたこと、例えば行政の仕事も、ひよっとしたらあと十年もしたらAIが半分以上やってしまうかもしれませんね。AIは文章生成が一番の得意分野ですから。

るJAさんにはとても大きな役割があると思いますので、ぜひJAさんに期待したい。同時に全国組織の皆さんたちにも支えていただいて、行政とも連携し、場合によっては民間企業とも連携し、支えて、あるいは一緒に地域をつくっていただければと思っています。

私の総括はこれで終わります。ご清聴ありがとうございました。

そう考えると、自分にこれから何ができるのか、何がやりたいのかを考える。そうしたことができる社会システムをつくる必要があると思います。

7. まとめ—JAへの期待—

私は今まで長いこと農福連携の研究をしてきましたが、地域の様々な主体が、さらに新しい連携をつくっていくことを「農福+a連携」と呼んでいます。

まさに農村RMOでも、色々な主体が連携し、新しい形の助け合いをつくっていくことが大切になってきます。地域の産業を支えることについても、同じことがいえると思います。

今日のセミナーのテーマは「地域の協同で「農」と「くらし」を守る」でした。国も地方自治体も大変な今の時代でも、地域のあらゆる主体が一緒になってやっていく。地域で活動す